

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

布と人の人類学を構想する：機関研究：
「マテリアリティの人間学」領域
布と人間の人類学的研究 (2010-2012)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関本, 照夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5245

機関研究 ● 「マテリアリティの人間学」領域
布と人間の人類学的研究 (2010-2012)



手描きパティックの工房で蠟描きをする女性たち(インドネシア)。

モノが人に働きかける

博物学から人類学に至るこれまでのモノ研究は、人がモノを作り使う人の能動性の側からモノを客体視していた。これに対し、現在の世界各地で行われる新しいモノ研究は、モノの働きが人に作用する力にも大きな注意を払っている。加工する素材の性質や人間の身体各部の作りがモノ作りに大きく影響すること、衣服や家のインテリアの作りや感触が人の気分を変えることなどは、その一例である。こうした関心は、人を神に代わる至上の存在とした近代的な世界観・人間観への自己批判の流れと結びつく。フランスの地理学者ベルクの言葉を借りれば、「近代的な主体は自分自身と事物の間に根源的な区別を設け、自然に関する近代の科学の基本的な客観性を確立する」(ベルク 1990:56)。そうした人間主体の至上主義の下では人が主体であり、他の事物は、もっぱら人間が認識し、定義し、また作り出す客体となる。これに対し、イギリスの人類学者インゴルドはこう言う。「モノの形は上から与えられるのではなく、環境の中の人と物質の相互的関わりから生まれ育っていくのである」(Ingold 2000:347)。ここで「上から」とは、人の頭脳にまずデザインや青写真があり、それを人が一方的に物質に適用し、加工し役立つものに変形するという近代の常識を言っている。こうしたことをヒントに、モノ-人の相互関係を考え直すことが可能ではないだろうか。

私たちの機関研究プロジェクトは、「マテリアリティの人間学」領域のもう一つの

プロジェクト「モノの崇拜」と共に、モノと人との相互関係を考察する。その考察の媒体としてとりあげるのは「布-人」の相互関係である。メンバーはこれまでいずれも、アジアの各地で伝統染織や関連する工芸の研究を行い、個々に研究成果を発表してきた。これらを総合し、布から出発してモノと人の関係を論ずる新たな人類学的領域を築くことに、このプロジェクトの目的がある。布の生産、流通、消費の諸事例を、過去からのつながりや変化に注意しつつ比較検討し、人の身体性、環境規定性、実践的・状況的知識、地域性、人-モノ-人のネットワークなどについて、新しく具体的な知見を生み出すことが目標である。そこでは、人とモノを峻別せず、人自体が物質性・肉体性に根ざしていることに着目する。過剰な人間中心主義、精神や理性の中心主義を批判し、モノと人が相互浸透し融合する世界を描き出すこと、ここに大きな目的がある。



首都の女性会館にある工芸品展示場(ラオス)。

布から出発する

布は飲食物と並んで人の身体に近いものであり、また人間生活に普遍的である。飲食物は直接身体に入り込み消化されるが、布は皮膚に接しつつも身体の外にある。布はこの身近さと外部性ゆえに、「モノ-人」関係の検討に対し興味深い素材を提供する。研究が過度に思弁的となるのを避けるためには、布と人との往復的関わりを、時間・空間をまたいで比較研究する方法が有益だと私たちは考えている。日本の人類学でもすでに、いろいろな地域社会の人々が布をどう作り、どう使うかについての事例研究はかな

り蓄積されてきた。その上に立って、布を通じて見たマテリアリティの人類学を育てていきたい。

なお、日本語で「布」という時は、衣服や布製品と区別されて、ハサミのまだ入らぬ生地・反物などを意味しがちだが、私たちの研究が布というのはそこに限定されたものではない。むしろ、生地としての布も裁断縫製された衣服も含む英語のclothという語が、ここでの研究対象により近い。

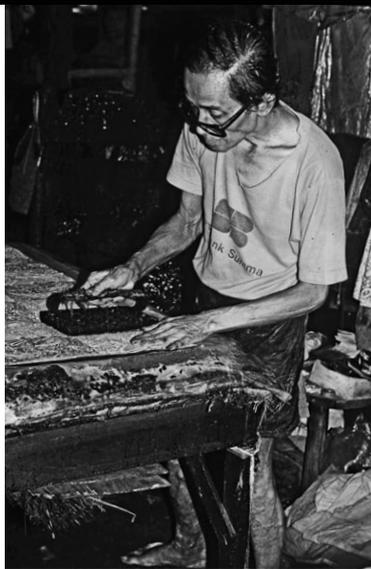
より広く見ると、布あるいは繊維の研究は、これまで美術史の一分野、しかもその中心からはやや遠い一分野として行われてきた。そこでは、布を色・柄・素材等で分類し起源や伝播の道をたどること、製造の技や用具を同様に分類整理することに、努力の中心があった。また経済史分野では、一つは遠隔地交易と関わり、もう一つは産業革命と工業化に至る市場経済の発展過程をたどる作業として、多くの研究が行われてきた。社会史の分野でも近代の衣服・身なりの研究は西欧を中心に発展し、ファッション史の研究、消費社会の研究ともつながっていく。

工業の布、工芸の布

幕末の日本でも近代初期の西欧でも、織物業はその後の工業化に直接・間接につながる重要な産業だった。現在までに至る産業社会でも、繊維は依然大きな産業分野であり続けている。近代世界において美術という概念・制度が確立した時、その対立項として考えられていたのは実用の具を作る工業、とりわけ産業革命以降の大規模な工業である。また、純粋な美術と工業との中間項として工芸という対象も作り出された。この点で、布・繊維は、それ自体中間項である工芸と工業という二つの領域にまたがるので、近代の事物分類上あいまいな位置に置かれてきた。美術史側では、近代工業からの距離が遠いいわゆる手作りの伝統染織に研究の焦点が絞られ、工業的な布・繊維は経済史分野から主に統計的手法を用いて研究されてきた。工業としての布の研究と工芸としてのその研究との間に、接点は乏しいままだった。

人類学の研究は直接大工業からは出発しない。だが、「伝統染織」とか「手作りの布」という言葉で世に知られるような布も、大工場・動力式機械を伴う近代繊維産業と無縁なまま今日まで生き延びてきたわけではない。糸、生地の利用などいろいろな面で近代繊維産業と密接につながる場合、近代産業との対比で独自の市場ニッチを見つけている場合、あるいは大工場製の布のデザインに小地域の伝統的な染織が影響を与えている場合など、両者の間には複雑な相互関係がある。そうした関係の広がりの中で布というものを捉えていくのが、より生産的であろう。

したがって私たちのプロジェクトは、伝統染織と技術の記録・保存のみに向かうのではなく、現代のグローバルな市場社会におけるその生産・流通・消費を各地の例から比較研究し、機械制工業が生む繊維・布、さらには衣服・ファッションにも目を向けながら、人が布とどう関わり、布がどう人の暮ら



銅スタンプで蠟文様を押すバティック作り (インドネシア)。

しに働きかけているかを検討する。また、布の消費と生産とを一方のみに偏らずに検討する。身を覆う、飾るといった布の消費の研究と、身体とモノとの相互運動から布が作り出される生産の側面は、これまでとかく別々に語られてきた。モノと人の相互関係、相互浸透という視点から布の生産・消費を総合的に考察するのも、この研究が目指す新たな領域である。

たとえば「風合」という言葉が、布によく使われる。布の柔らかさ、ざくっとした感じ、その他なんでも身体に感じる感触から「軽い風合」、「しなやかな風合」など、さまざまに言う。触感に限らず、見た目の感じ、匂いなどあらゆる感覚を含んだ総合的な言葉である。こうした総合的な感覚によるモノとの交流は、布を作る技の面にも現れる。ここにも布と人のテーマに接近する手がかりがある(関本 2011)。

目指す成果は

私たちは、このプロジェクトでの共同の研究成果を、ワークショップ、シンポジウムなどを通じて発表し、最終的には、今後の人類学的な布研究・モノ研究において一つのスタンダードとなるような書物を刊行したい。現在、日本の人類学では、かつての物質文化研究は十分に継承されていないが、若手研究者の中にはモノに関心を持ち、新たな研究視角を模索する者がむしろ増加している。プロジェクトでは、フィールドでモノと向き合っている若手研究者をできるだけ広く加え、成果の刊行のみならず、今後につながる研究のネットワークと次世代のリーダーシップを築くことも、一つの課題としている。これは、プロジェクトのシニアの参加者がすでに築いている国際的な人的ネットワークを、次世代に引き継いでいく作業でもある。メンバーが固定されて一定期間続く形よりも、開かれて人が出入りしながら広がっていくプロジェクトとしたい。

また布の研究というものは、生産・流通の実践者、消費者、布愛好家に絶えず注目され、批判を向けられるものでもあり、国内外のこうした人々と経験を交流し新しいアイデアを作り出し、社会的に幅の広い成果や資料の公開を、専門的な人類学的研究と並んで行うことも目指している。

【参考文献】

- ベルク、オギュスタン 1990『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』篠田勝英訳 講談社現代新書。
- Ingold, Tim. 2000. *The Perception of the Environment: Essays in Livelihood, Dwelling and Skill*. Routledge.
- 関本照夫 2011「布からモノの働きを知る」『月刊みんぱく』35(5): 10-11。

せきもと てるお

先端人類学研究部特任教授。専門は仕事・工芸の人類学。編著書に『国民文化が生れる時:アジア・太平洋の現代とその伝統』(リプロボート 1994年)、論文に「ものを作る技の考察」(松井健編『自然の資源化』弘文堂 2007年)など。